

2019  
おもろ  
チャレンジ

## リノベーション先進国に学ぶ建築設計 一泊まり歩きを通じて

工学研究科修士課程 1年

野間 有朝

オランダ

2019年9月4日-

2019年9月27日



### 渡航概要と内容

[渡航概要]

オランダの2大都市アムステルダム、ロッテルダムを中心に民家、ゲストハウス、デザイナーズホテルなど様々なタイプの宿に泊まりながら街を巡り、住居やその他の建築に見られる建築設計手法などを習得する。

次の6件の宿に宿泊した。



①アムステルダム北部ザーン地域の軒家



②同じくザーン地域のデザイナーズホテル



③アムステルダム南部のユトレヒトのリノベーションカプセルホテル(写真中央)



④ロッテルダムの長屋建築のユースホテル



⑤ロッテルダムのデザイナーズホテル



⑥ロッテルダムの簡易ホテル

宿に宿泊して図面を起こしたり人と話したりするだけではわからないことも多いため、現地の美術館、博物館、図書館などの資料を確認したり、建築をみて回ることによりオランダの実態を理解することができた。またデルフト工科大学では実際に研究者の方のお話をお伺いした。

#### [文化の違い等から苦労したこと]

日本では大体親切に対応してもらえるが、オランダでは人によって対応の仕方の落差が激しかった。美術館や飲食店など、そして若い女性は比較的対応がよかったが、駅やバス停など公共交通機関の案内がすごく雑なことが多かった。聞いても相手にされないことが多いが、しつこく尋ねれば答えてもらえることもあった。また、何か尋ねれば、ここに電話してくれなどと自分で対応させられることも多かった。

また、言語の壁も思っていたより大きかった。上記のようにかなり適当なので、英語を話してくれないことも多い。第一都市アムステルダムでは英語表記もあるのでそんなに苦労しなかったが、第二都市ロッテルダムですら英語表記はかなり少ない。オランダ語の単語は英語とほとんど同じというものも多いので 10 日程オランダで過ごした後であったから何とか理解できたが、いきなりそれだけだともっと苦労していたと思う。例えば、トイレの表記にマークがなく見慣れない文字だけで男女の区別がされていたとしたら難しいではないだろうか。オランダはアイコンデザインなどが豊かであったのでトイレは苦戦しなかったが(むしろデザインがユニークすぎてわからなかったりもした。特に LGBD に寛容な国であるから、トイレも男女だけでなくもう一つあったりする)。

窓を開けて寝る文化があるのか、大抵の宿は窓が開いていた。窓を閉めていてもクリーニングの時に開けられていた。それに気づかないで到着して初日に風邪を引いてしまった。また、日本のように宿にティッシュはないので、ティッシュを 1 箱とポケットティッシュも用意していたがすぐになくなり調達するのに意外と苦労した。他にも、飲食店や駅などのトイレは基本有料なので硬貨を持ち合わせていないと行きたくても入れないときもあった。駅の券売機などもクレジットカードか硬貨しか使えない(お札が使えない)ので、カードを読み込めず(たまにある)硬貨を持っていないときはかなり困った。こういう時日本では窓口で切符を買わせてもらえたりするが、券売機があれば取り合ってもらえないこともしばしばあった。両替する際は基本的にお札しかもらえないので、空港で何か買って小銭を用意しておくのが得策であると思う。日本と違いキャッシュレスがかなり進んでいたが、まだ完全には移行できていないため過渡期によるトラブルが結構多かった。

#### [トラブルとその対処方法]

着いてすぐ風邪を引いた。日本から持って行っていた風邪薬を飲んでしたが全く効かず。ヨーロッパにきている日本人のブログなどを検索し、風邪薬を購入して少し落ち着いた。

腹痛や頭痛など発症しそうな症状の薬はかなり多めに持って行っていたが、蕁麻疹を発症した。幼少期以来発症していなかったので薬など持っていなかった。現地で薬を購入して対処したが、それ以降夜になると身体中に蕁麻疹ができるようになってしまった。

ある日クレジットカードが使えなくなった。とりあえず、カード会社への連絡などをしようとしたのだが、私の場合 sim カードを入れ替えていたため、スマートフォンの電話機能が使えなくなってしまっていたためかなり苦戦した。いざという時のために国際電話はかけられるようにし

ておいた方がよいというのが今回の反省点である。宿で国際電話はなかなか使わせてもらえないし、今や公衆電話もほとんどないので、電話がないとかなり致命的になる。だが、国内電話であれば電話を割と容易に電話を貸してもらえし、クレジットカード会社の海外窓口で電話するなど、他の対応策を考える方がよい。緊急時の窓口が日本なのか現地にあるのかあまり意識しないかもしれないが、それによってかなり状況が異なってくる。私使用していたカードの窓口は日本にあったため、現地の窓口では対応してもらえなかった。そのため、家族に家の固定電話から日本の窓口かけてもらい、電話回線を使わない通話アプリを用いて私と家族が電話をつなげ、電話のスピーカー越しに対応してもらった。これは、窓口の方が許可して下さった方法だが、本人の電話番号からかかってきていなければいけないとなれば、この方法は使えないかもしれない。電話でわかったことは私のカードが不正利用を疑われ、自動的に止められたとのことでした。実際、私がしていない高額の買い物を行っていない場所で次々とされていたそう。本人の確認がとれたのでそのカード番号は使用停止となった。(海外で不正利用が疑われて止められることはよくあるそうだが、その場合はカード会社に電話して本人の確認がとれば再び使えるそう。)

次のトラブルとしては、カードを止められたため、まだ滞在期間が10日以上残っているのに十分な所持金がなくなったことだ。現金もかなり多めに持ってきていたが、カード支払いの予定の宿が、現金で支払えと言われたために想定よりも手持ちの現金がほとんど残っていなかった。その上、もう1枚持っていたカードはマイナーカードだった。スーパーですらカード払いのみの店が多いので(店員さんに言えば現金で支払わせてくれる店もある)、食事すら厳しい状況になった。とりあえず、ヨーロッパにいる友人たちに連絡をとって食事ができる程度の現金を借りた。またクレジットカード本体を持っていなくてもカード番号がありSNSでの認証ができればApplePayが使えたので、家族のカードをiPhoneに登録し、クレジットカードと同様に使うことができた。

それ以降は大きなトラブルはなかった。

今やスマホとクレジットカード(国によっては現金)があれば、大抵の問題は解決するが、(私もそれまでのトラブルはお金で解決してきた)これらがないと本当に身動きが取れなくなるので複数持っていくことをお勧めする。私はスマートフォンを盗まれた話は友人からよく聞いていたため、念のために電子デバイスは複数台持っていたが、クレジットカードを3枚持っていなかったのは甘かったと反省している。

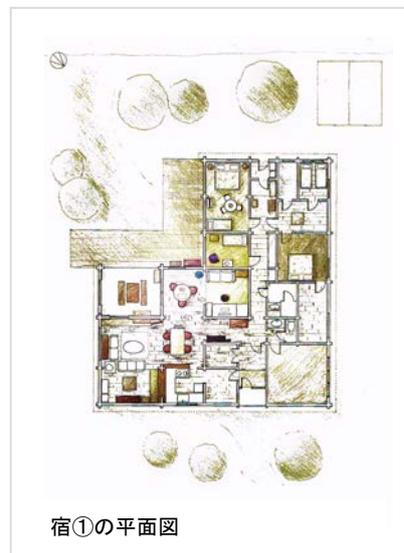
色々あったが、私は身の危険を感じることはなかったため、その点ではよかった。

## 渡航を通じて感じたこと・学んだこと

今回、オランダの2大都市アムステルダムとロッテルダムを中心に、民家、ゲストハウス、デザイナーズホテルなど色々なタイプの宿に実際に宿泊しながらオランダ人の居住に対する考え方や、建築デザイン手法などを調査した。

アムステルダムの北部のザーン地域について、この地域は昔ながらの風車で有名な地域であるが、アムステルダム滞在中の大半の期間をこの地域の宿①、②で過ごした。

宿①のホームステイ先は老夫婦のご家庭で、築約30年の木造住宅で、フィンランドから取り寄せた木で建てたとのことだった。子供7人が巣立って空いた部屋を観光客に貸しているようだ。子供がたくさんいただけあり、とても面倒見がよくて親切で色々なことを教えてくださった。



宿①の平面図

宿②のホテルについて、これは建築雑誌にも載っているような有名なものだが、写真で見ているより周辺に馴染んでいるため違和感がなかった。この地域の住宅を縦に詰むといったコンセプトのホテルであったが、色彩などは周辺の街にかなり調和している。



有名な風車（左）と宿②周辺写真（中央）と宿②の平面図

ただ宿の内観に関しては、オランダの建物特有の屋根裏空間が見えるものではなく、フラットな天井面だったのは少し残念だった。（最上階の部屋ではそうなっているらしいが、途中階の外観の屋根はハリボテである。）

宿③について。ここはリノベーションホテルであるが、オランダでは珍しいカプセルホテルだった。そもそも、カプセルホテルとは日本で生まれたものであり、海外ではそれに近いドミトリーがあるが、カプセルという形で全面的に囲んでしまうのは日本独自の発想であると考えられる。また、法律的にも異なるものらしい。

多くのゲストハウスはカーテンがついているのだが、ロッテルダムのゲストハウス宿④、⑤はカーテンがなくオープンで、流石に落ち着かなかった。赤の他人と寝ることがあまり気にならないらしい。室内があまりにも簡素な分寝る以外の共用部分はかなり充実していて、部屋にあまり人はいなかった。



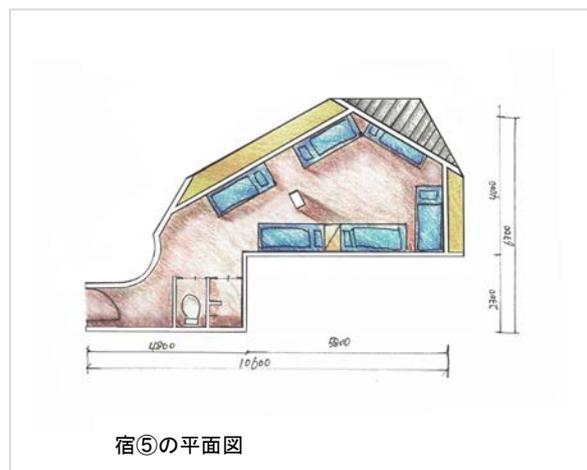
宿③カプセルのアイソメ

宿④。ベッドが並ぶだけの簡素なものだが、屋根裏のスペースだけカーテンではあるが個室になっていた。



宿④の平面図

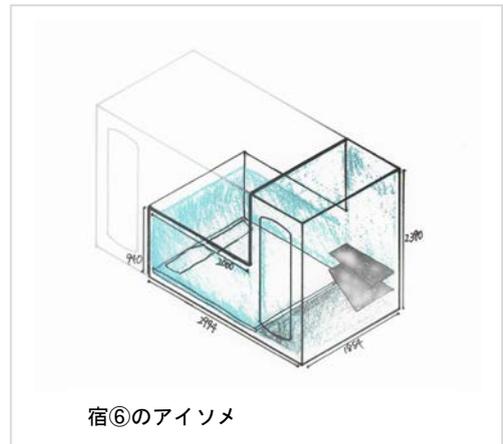
宿⑤。斜め壁で構成される部屋だが、屋根裏部屋のような感じであまり違和感はない。同室の方は窓が小さいと文句を言っていたが。ここはこの建築を目当てにきている人が多いので、知らない人同士でも話に困らなかった。



宿⑤の平面図

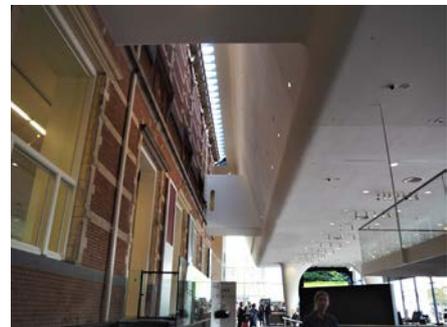
その点、宿⑥に関しては、カプセルホテルの進化系のようなもので、フロントすらなかった。この宿も、ライトの色を変えたり、音楽を流したりできるが、音漏れがやや気になった。

L字型のユニットが並ぶ。ドアの形状や採光、防音など、デザインに特化しすぎたためにやや快適さに欠いていた。



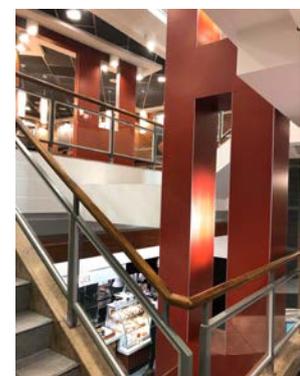
宿⑥のアイソメ

次に、オランダの第1都市アムステルダムについて。アムステルダムの街は京都の都市構成に近く、セントラル駅を中心に、商業街、美術館エリア、歓楽街などが非常に狭い地域の中に広がっている。そのなかで歴史的景観を保持するためにリノベーションが成されていた。例えば、アムステルダム美術館は街路から見れば古くからある建造物なのだが、美術館エリアの中に入っしまえば現代建築である。



アムステルダム市立美術館の本館側外観（左）と新館側外観（中央）、本館と新館の境目（右）

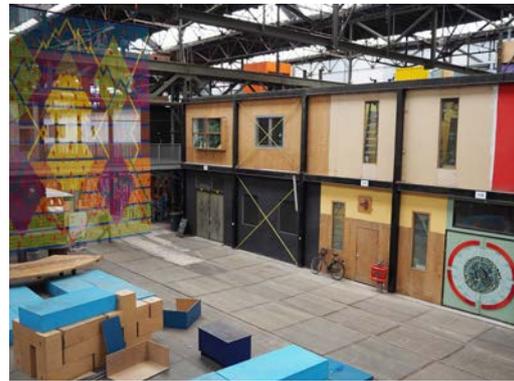
そして、古くから並ぶアムステルダム特有の長屋建築の多くはスキップフロア構成になっており、住居であっても、飲食店であっても商業施設であっても、基本的な造りは同じであった。エレベーターがない施設もあり、バリアフリーというものは皆無に近い。建築自体は新しいものでも、その造りというものは一貫しているようであった。土地が狭いので必然的ではある。



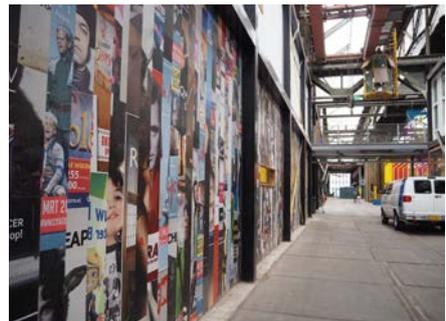
ファーストフード店の内装もスキップフロアで構成されている。

平面的に住居を捉える日本人とは違い、立体的に把握しているように感じられた。そのためか、駅や美術館等公共施設の案内も多くは平面図ではなく、断面図やアクソメ図で書かれているものが多かった。また、美術館や大学で都市模型が多く見かけた。街を立体的にアーカイブできていることに感心した。

アムステルダムは中心部から外れると港町特有の倉庫などが多く、まだ開発中のところも多かった。急に図と地が反転するように、中心部では建物が高密度に詰まっていたものが、中心から外れると広大な敷地の中にポツンと建物が立つようになる。その中で、NDSM という倉庫をアーティストのアトリエやイベントスペース等に改修中の建物に入ることができた。一見すると古い建物に見えるのだが、実際に近づいて見ると、古いテクスチャと新しいテクスチャの違いがよく分かる。

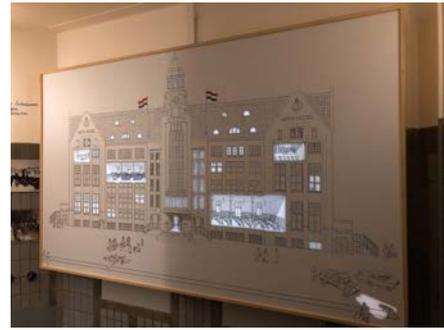


NDSM の外観（左）と内観（右）



既存の構造体（左）それに溶け込ませるように落書きや張り紙などを施すも実際近づいてみると新しいものだと分かる（右）

また刑務所など様々な変遷を遂げてきたロイドホテルはその歴史をホテル内にギャラリーを設けて展示していた。街中の長屋と違い一軒ポツンと残っている建築ではあるが、半階ずつのスキップフロア構成はここでも見受けられた。また、鉄格子など所々に刑務所であったことが伺える跡が残されている。



ロイドホテル内のこれまでの利用を表現した断面図。



昔から変わらぬ外観（左）リノベーションされたカフェ（中央）昔の傷跡などがそのまま残る廊下（右）

次にオランダの第2都市ロッテルダムについて。ここは、アムステルダムとは異なり、戦争で街全体が一度壊滅してしまった歴史がある。そのため、歴史的建造物は比較的少ない上に、1から作り出された街なので奇抜なデザインの建物が点在している。そして、建物の平面的な密度は低く、建物が上に伸びていった戦後できた街であることがよく分かる。道幅が広く、ヒューマンスケールから乖離した都市で、歩いていてアムステルダムのような楽しさはない。



ロッテルダム美術館。通りに対して現代的なガラスのファサードが面す。



内観の様子。アムステルダム市立美術館と同様境目がよく分かる。



ロッテルダム湾外沿いの元倉庫と思われる建物。一部テナントが入ったりサーカス小屋があったりしたが、倉庫をそのまま仕切って使っているといった様子で、このまま使い続けるのは少し厳しいように思えた。ただ、現在また新しいテナントが入る準備をしているところだったので、今後変化すると思われる。



ファン・ネレ・ロッテルダム。元工場をアートスタジオとしてコンバージョンされた建物。

これも工場の設備を除けてそのまま使っているといった様子で、おそらく使われていない部分も多いようだった（一応イベントスペースということになっているので、常時は使われていないだけかもしれない）。



ホテル・ニューヨーク。オランダと北米を結ぶ Holland America Lines の本社であった建物。19 世紀から 20 世紀初頭にかけて使われた。ロイドホテルと似た構成をしているが、ロイドホテルのほうに新旧の明確な差異はなく、どこが改修された部分なのか一見しただけではわからなかった。



デルフト工科大学の建築学部棟内のオレンジホール。ここでレクチャー、自習、飲食など様々な活動が行われ、既存の校舎内にある各研究室からアクティビティが見える。ただし、夏は物凄く暑いという不満の声がある。ガラス屋根のホール内はもちろん既存の校舎も外部に面する窓が減るために風が通らないとのことだ。



以上のような建築を通してリノベーションにも地域性があることが分かった。

アムステルダム、ユトレヒト、デルフトなど伝統的な建築が多く残る街では、伝統的な建築を如何に魅せるかということ意識しているように思われた。だが比較的新しい建築が多いロッテルダムでは、使わなくなったものを如何に手を加えずに再利用するかという視点でリノベーションされていたように思う。もちろん、ロッテルダムにも歴史的にも古くから残り歴史的にも重要だという点で残っている建築もあるが、そのまま使っているという印象であった。

以上が今回の渡航を通して感じたこと学んだことである。

## 今回の経験をどのように今後生かしていくか

泊まり歩く中で感じたのは、人はやはり安堵できる場所が必要だということです。寝るときも落ち着かない宿だとやはり体調が優れませんでした。他人との距離感、ここまでは共用でも耐えられるが、これ以上だと厳しいなど、身をもって感じました。これは人によって感じ方が違うとは思いますが、今後設計していく中で、プライベートなスペースの取り方などは施主様と相談しながらにはなりますが、快適な住居、宿を設計できればと思いました。

オランダ建築の大胆なデザインとその背景をたくさん見てきました。これまでは雑誌やインターネット上で二次元的にしかそれらをみたことがありませんでしたが、実際にその建築に入ると、思っていたのとは違ったり、一日の中での変化を感じとることができたり、温度など写真では絶対に伝わらない情報があったり、発見ばかりでした。

また、デルフト工科大学では研究中の先生方ともお会いすることができたので、今後オランダの建築について研究する可能性も探ってみようと思います。

## 本プログラムでの渡航を考えている学生へのアドバイス

このプログラムを希望しているということは、何かしら日本ではできない何かをしたいと思っていらっしゃる人だと思います。どこで何がしたいという意志がある人は積極的に応募してみるといいと思います。私は学部生の頃からオランダの建築に興味があり、オランダ中の建築を巡って見たかったのですが、女子学生1人で旅をするのは家族から反対され、資金の確保も含め実現できませんでした。ただプログラムというバックアップがあることで、ようやく実現することができました。ある程度の現実味があるが、金銭面であったり、一人ではどうにも動きづらかったりしますが、奨学金を貰うからには腹を括って実行するしかないのです。迷ってる人は是非応募する

ことをお勧めします。

## ■ 主な奨学金の使途

\*宿泊費

\*渡航費

\*現地交通費、調査費

\*食費、生活費

\*通信費、海外旅行保険料 など